



from WASHINGTON, D.C.

セキュリティ・チェック！



厳重なセキュリティのIMFのエントランス

いったい、あと何十分待たせる気だよ……？

ワシントン・ダレス空港の入国審査で、別室に通された私は30分以上も待たされ、イライラは限界に達していた。

こっちは仕事帰りで疲れてるんだ。何らヤマシイものは持ってないし。この、家族のためコツコツ働いている、どう見ても真面目な中年男の、どこが怪しいってのさ!! とキレかけたところに、係官が微笑しながら戻ってきた。

「悪かったね。お前さんが待たされてた唯一の理由は、乗機地がシリアだったからさ。お前さんがIMF職員だったのはわかってたけど、シリア帰りは例外なく別室行きてことになるんでね。お疲れさん。家に帰ってゆっくり休んでくれや」

主要観光資源が政府施設、かつ犯罪発生率も高いワシントンDCは「セキュリティ・チェックの街」でもある。自由の女神をシンボルに掲げる米国では、何事にも「門戸を閉ざす」ことには根強い抵抗感がある。では治安の問題はどうする？ 結局、「入念にチェックしてから入れる」という話になる。

靴を脱がされたり金属探知機をくぐらされたりして愉快そうな人はあまりいない。そりゃ、自分では十分善良な市民のつもりなのに、「お前ももしかしてアヤシヤツではな

いか？」と見られて機嫌が良いはずがない。しかし、チェックする側の人々も大変である。一日中、チョット不機嫌な人々を相手に、しかも、本当にアヤシヤツは見逃さないよう目を光らせなければいけないのだから。

DCの最近の話題に、DC警察が導入した「チェックポイント」がある。これは、犯罪多発地域への車の立ち入りを警察が全てチェックし、正当な目的のある車だけを当該地域に入れるというものだ。しかし、これは憲法違反だ、DCをPolice Stateにするなといった反発も強く、訴訟を起こしてこの制度を止めさせようとする動きもある。米国はやっぱり議論の国だな、と思う。

さて、DC勤めもしばらくすると、さすがに当方もセキュリティ・チェックに慣れてくる。小銭や携帯やデジカメはあらかじめ全部ジャケットのポケットの中。このジャケットは脱いで丸めてトレイに入れ、靴も言われる前に脱いでトレイに。これで金属探知機もスイスイっと。

ピ〜。

あれ……？

あんた、ズボンのベルト取んなかったんだね。ネバーマインド！ 良い一日を！

(国際通貨基金(International Monetary Fund)本部、ワシントン)



上／観光客でにぎわうホワイトハウス
左／要人ヘリコプター警護のためホワイトハウス前の広場を一時的に立入禁止にする警官